

### 338 神経芽細胞腫における<sup>131</sup>I-meta-iodobenzylguanidine (MIBG) シンチグラフィ

桂木 誠, 一矢有一, 桑原康雄, 和田 誠,  
綾部善治, 松浦啓一(九大 放)  
中川原章, 池田恵一(同 児外)

Guanethidineの類似物質である<sup>131</sup>I-meta-iodobenzylguanidineは副腎髄質に親和性を持ち、褐色細胞腫に集積する薬剤として注目されている。われわれも第43回日本医学放射線学会(59年3月)にて、その有用性を報告した。

今回は神経芽細胞腫の<sup>131</sup>I-MIBGシンチグラフィによる陽性描画について報告する。対象は3例でそのうちの2例は原発巣摘出後の症例である。

<sup>131</sup>I-MIBGシンチグラフィでは、1例は左副腎の原発巣へ、3例は転移巣(頭皮、骨、肝)への集積がみられた。本薬剤によるシンチグラフィは、腫瘍の質的診断が可能であること、ひいては治療への応用の可能性もあり、極めて有用と考えられる。

### 339 糖尿病における下腿三動脈の血管障害の検討—RI Angiogramを用いて—

伊藤秀稔, 島田孝夫, 斎藤宣彦, 磯貝行秀(慈恵医大三内), 森豊, 川上憲司(同放射線科)

糖尿病(DM)では動脈硬化症を伴いやすいが、その血管病変は非糖尿病患者に比しより末梢動脈にそしてより早期に発症しやすい。しかしこの病態を簡便に検索する方法はなく、したがって統計的な検討を行なわれていない。今回我々はDM例72名(糖尿病性壊疽合併例26名)を対象として、5mCiのTc-99m Microsphere albuminを大腿動脈ボーラス注入法を施行し、その血管病変の発症頻度、壊疽との関連について検討した。その結果全症例の72%に何らかの血管病変を伴っており、特に後脛骨動脈、前脛骨動脈に発症頻度が高く、膝窩動脈はかなり低かった。また壊疽合併群と壊疽非合併群との間でも血管病変の発症頻度に有意差はなく、壊疽発症にDM性自律神経障害が大きく関与している事を示唆した。40才以下の比較的若年層のDM患者群においてその68%と高率に何らかの異常画像を示しており、DMではかなり早期より血管病変を伴っている事がわかった。以上よりDM患者ではかなり早期よりそしてかなり高率に下腿動脈の血管障害を合併している事がわかった。しかしDM性壊疽発症にはあまり関連がない事がわかった。

### 340 Tc-99m-MISA 動注法と Tl-201 動注法による PGE1 治療時における糖尿病性壊疽の評価

森 豊, 石川隆志, 中谷理子, 間島寧興, 川上憲司(慈大 放), 伊藤秀稔, 島田孝夫(同 三内)

近年、難治性とされている糖尿病性壊疽の有力な治療法としてPGE1が注目されているが、その投与法が確立されていない。今回Tc-99m-MISA(Micro sphere Albumin)動注法、Tc-201動注法を用いて、PGE1動注法および静注法を比較検討した。糖尿病性壊疽例ではTc-99m-MISA動注法より求めたシャント率は、非壊疽例群より有意に高いことは既に報告したがPGE1動注例では、シャント率が、壊疽の治療とともに著明に低下を示した。しかし、PGE1静注例の多くはシャント率は増加傾向を示し、壊疽の改善も悪かった。PGE1動注法と静注法を比較すると前者の方が有効であった。このことより、Tc-99m-MISA動注法により求めたシャント率が、PGE1治療時糖尿病性壊疽の治療効果判定において客観的評価の指標として有効であることが示唆された。Tl-201動注法は、壊疽部に一致したhot spotを形成する点で、Tc-99m-MISA動注法と差を認めなかったが、治療効果とよく相関するシャント率を測定しうるTc-99m-MISAの方が、PGE1動注法の治療経過観察には適した検査と考えられた。

### 341 改良法による血中1,25-dihydroxy D測定 の臨床的意義

山田和代, 山村聡子, 青木 純, 日野 恵,  
滋野長平, 山本逸雄, 鳥塚莞爾(京都大学 放核)  
土光茂治(京都市立病院 核)  
福永仁夫, 森田陸司(川崎医大 放)

前年の核医学会総会にて、新しい血中1,25-(OH)<sub>2</sub>D測定法について報告したが、今回、その測定法を用いて、正常者および各種疾患につき測定を行ったので報告する。健常人について年齢別の値をみると、10代の人において高値をとる傾向が認められた。20~40代の人の値は25 pg/ml~60 pg/mlに分布した。健常人において、日内変動を検討したが、日内変動は認められなかった。また、健常人において月内変動をみたところ、正常女性においてその変動が大きいことが認められた。妊娠末期において1,25-(OH)<sub>2</sub>Dは高値を示したが、分娩により、その値はすみやかに正常に復した。その他、副甲状腺機能亢進症、ビタミンD投与例において高値を示し、一方、慢性腎不全、糖尿病、甲状腺機能亢進症、副甲状腺機能亢進症以外の高カルシウム血症、副甲状腺機能低下症、低リン血症性クル病、ビタミンD欠乏性クル病等で低値を示し、本測定法の有用性が認められ、これ等疾患の病態把握、経過観察に有効と考えられた。